

[地域動向]

隠岐郡海士町の挑戦と 高校魅力化プロジェクト

敬愛大学経済学部教授

藪内 正樹

はじめに

千葉県は、つくばエクスプレスと常磐線が通る東葛地区と、総武線と京葉線が通る湾岸地域からなる人口流入地域である千葉都市圏と、空港ゾーン、香取・東総ゾーン、圏央道ゾーン、南房総ゾーンからなる人口が流出している千葉地方圏に分かれている。千葉大学「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」は、文部科学省の補助事業として、千葉地方圏において魅力ある就職先の創出と地域が求める人材の育成を推進している。

敬愛大学は、平成28年度から副専攻カリキュラム「エアポート NARITA 地域産業学」を設け、空港関連の就職を支援するプログラムを実施し、これをもってCOC+参加校となっている。このプログラムは既存の職業への就職支援からスタートしているが、新たな産業を興すことが次の課題となる。そこで、千葉地方圏の地域創生に貢献する知見を得るため、平成28年9月8～9日、高校魅力化プロジェクトで際立った成果をあげていることで知られる島根県立隠岐島前高校を視察した。

同高校の魅力化プロジェクトは、中学卒業とともに島を出て、本土の高校に進学する子どもが増えたために入学生徒数が減り続け、そのままでは統廃合の対象となるとの危機感から始まった。しかし、現地視察と各種の資料を通じ、高校の改革が始まったのは、島全体の改革へ向けた動きの一環であることが分かった。その端緒は、過疎化と当時の小泉内閣の財政再建による財政破綻を予感した山内道雄町長が身を切る改革に踏み切ったことから始まった。そして、公共事業削減で生じた余剰人員を活かそうとした建設会社が隠岐牛の肥育を始めて成功し、町長自らも事業会社を起こして海産物のブランド化に取り組んだ。そうした島を上げた動きが、高校魅力化プロジェクトを生み、日本全国から島留学の高校生やIターン移住者を引きつけたのである。

以下に、隠岐郡海士町の概要と、町役場、建設会社、高校の三者が、それぞれどのように歩んできたか、要点を報告する。

1 隠岐郡海士町の概要

隠岐郡は、島根半島の北方約60kmに位置し、西ノ島町（西ノ島）、海士町（中ノ島）、知夫村（知夫里島）の3島からなる島前と、隠岐の島町（隠岐の島）の島後と、主要な4島と約180の小島からなる。竹島は隠岐の島町に属す。

隠岐諸島の4島には縄文時代から人が定住し、本土との活発な交流を示す石器や土器が出土する。7世紀に「隠岐国」が置かれ、古くから遠流の地として後鳥羽上皇、後醍醐天皇や公家、武士などの政治犯が流された。

2015年1月1日の人口は、海士町2,357人、西ノ島町3,046人、知夫村592人、隠岐の島町14,996人。海士町の人口動態を見ると、自然動態では一貫して出生より死亡が上回り、2014、15年は28人減、19人減となっている。一方の社会動態を見ると、2004年まで転出が転入を上回って減少し続けてきたが、2005年に初めて30人増となり、2006～2008年、2011年に減少したほかは増加した。2005～2014年の10年間に、自然増減では245人減少したが、社会増減では70人増加している。2010年の65歳以上の人口比率は38.9%で、全国平均の23.1%より高く、高齢化率の高い地域である。最も高い自治体は、市では夕張市の43.8%、町では福島県金山町の55.0%、村では群馬県南牧村の57.2%となっている。

海士町（中ノ島）の菱浦港は、隠岐の島の西郷港からフェリーで約70分、松江市の七類港へは約2時間40分。空港は隠岐の島にある隠岐空港だけで、大阪の伊丹空港から約1時間、出雲空港から約30分。

2 海士町財政の危機と脱却

1995年からの「平成の大合併」に際し、島前の3町村は海を隔てているため合併効果が少ないことから、それぞれ自立を選択した。

2003年の「三位一体改革」で地方交付金と補助金の削減が決定。前年に就任していた山内道雄町長は、「超過疎、超少子化、超高齢化」で「公共事業で生きてきた」町は2008年に財政再建団体に転落すると予測。以下の「守り」と「攻め」の手を打った。

1) 身を切る町財政再建＝給与カットと人員削減

2004年度；町長30%、助役・管理職・議員・教育委員20%、一般職員10～20%

2005年度；町長50%、助役・議員・教育委員40%、職員16～30%

2) 産業3課の設置

- ・交流促進課（観光と定住を促進）
- ・地産地商課（第一次産業の振興）
- ・産業創出課（新たな産業の創出）

*役場ではなく、観光協会、漁協直売所と同じフェリーターミナル内で執務。

- ### 3) 2005年、町長自ら社長として事業会社「ふるさと海士」を設立。当初の第三セクターから株式会社化し、5億円を投資してCAS冷凍技術^①を使った冷凍工場を建設。岩ガキ、剣先イカなど海産物をブランド化し、東京、大阪、米国、中国などに市場を獲得。2012年に売上2億円、収益595万円を達成。以前は境港に運ぶと翌日のセリになるため安値でしか売れなかった漁業者には収入増をもたらした。
- ### 4) 2006年度の農水省「立ち上がる農山漁」「概要」には「インターネットの民間求人サイトの活用や住宅の斡旋などにより3年間で100人を超えるIターン者を呼び込み、彼らが中心となって地域資源を活用した新しい商品・販路を開発」とある。

3 建設会社の挑戦

- ### 1) 「公共事業で生きてきた」町には10数社の土木建設に携わる会社、個人事業主があっ

た。1960年に個人事業から出発した飯古建設（資本金3,000万円）は、廃業する漁業者の漁具を買い取っての定置網事業や、木材チップを牛糞と混ぜて堆肥化する事業を行ってきた。隠岐諸島の農家は子牛を生産・出荷していたので、牛糞と木の廃材が地域にあったが、牛糞の量が足りなかった。

- 2) 政府の公共事業削減により、2002年に14億円あった売上が2005年には8億円の減少する流れが始った。「各家庭がよく見える小さな島で、給料は減らせてもリストラはしたくない」と語る田仲寿夫社長は、子牛の生産・購入から肉牛の肥育を行おうと考え、2004年、肥育の専門家を招いて有限会社・隠岐潮風ファームを設立（資本金4,800万円、役員2名、顧問1名、社員4名）。法人が農地の使用を行うため農業特区の承認を受けた。
- 3) 生後4～10ヵ月間は島の山麓で母牛と一緒に放牧。牛舎での肥育は30ヵ月（2歳半）まで行い、足腰が強いので病気に強い特徴をもつ。輸送費のコストを吸収するため高級ブランド化する必要があり、2,500円以上のA-5ランクが必要。開始2年後の初出荷で、東京食肉市場のセリで3,700円の高値が付き、量が限られていたため「幻の隠岐牛」と呼ばれた。「島生まれ、島育ちの隠岐牛」のブランドを維持するには月10頭以上の出荷が必要とアドバイスされ、紆余曲折しながら、2015年12月までの9年間に1,330頭を出荷。5等級率44%、4～5等級率80%を達成。



島生まれ、島育ちの隠岐牛

4 県立隠岐島前高校の魅力化プロジェクト²⁾

- 1) 中学卒業生の半数以上が本土の高校へ行くようになり、入学者数が1997年の77人から2008年の28人にまで減少。県の高校統廃合基準は21人。子どもたちが全員、島外で高校を卒業・就職し、島のコミュニティが存続危機に陥ると考え、2008年3月、3町村長・議長、高校校長、3中学校長、PTA、OB/OG会長などで検討委員会を設置。当初はテーマを「高校存続化」としていたが、「存続が危ぶまれる高校」では誰も入学する気が起きないだろうと「高校魅力化」に改めた。
- 2) 2006年に出席授業に訪れた岩本悠氏は、20歳で大学を1年間休学し、アジア、中東、アフリカでNGO活動を経験し、卒業後はソニーに就職。出席授業をきっかけに高校活性化に協力を求められて退職し、同年末に海士町に移住。東京都出身の「よそ者」の岩本氏は「魅力化には異文化・多様性が必要」とし、さまざまな提案を行った。



古民家を活用した「隠岐国学習センター」：
松下村塾を目指しているとのこと



視察団に説明する島留学の寮生

3) さまざまな取り組み

- * 日本全国から「島留学」を勧誘し、都会の子と島の子の相互作用を促した。
- * 地域課題学習：島の人に聞いて課題を見つけ、解決法を考える。
- * 2009年、「ヒトツナギの旅」が第1回観光甲子園で文部科学大臣賞を受賞。
- * 地域課題学習に海外との交流を併せた「グローバル人材育成」を実施。
- * 2010年、公立塾「隠岐国学習センター」設立。塾講師を全国から招聘。もともと学力や進路の違う子がいる小規模校の指導は難しい。さらに意識や学力の高い島留学の生徒を受け入れたため、学校と補完・連携し、個性に合わせた指導を行う塾だった。希望者は最初数人だったが、2016年は全校生徒180人中150人が通う。
- * 夢ゼミ：塾の課題として、地域・外部の大人と対話、自分の夢を重ね、実現法を考える。

* 高校教師も、地域課題学習という新たな取り組みを進めるうちに授業改革の動きも出てきた。学力差のある子が共に伸びる、眠くならない授業を試行錯誤しながら、中村先生はアメリカ独立戦争について、「なぜ独立しようと考えたか」二人一組で考え、教師にプレゼンテーションするアクティブラーニングを行っている。

* 2015年、島留学の生徒に対する島親制度を開始。

4) 成果

* 入学者数：2008年28人から2016年65人（入学定員80人）に。うち島外28人、県外24人。

* 島留學生は入学定員の30%、24人を上限としており、これに対して100人を超える希望者が集まっている。

* 2015年、スーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定される（文部科学省）。シンガポール研修、ネパール訪問、留學生の受入れ（マレーシア女子1名、ロシア短期）が評価された。

隠岐島前高校魅力化推進協議会が運営しているサイト「島前高校魅力化プロジェクト」の中にある「今後の課題」には、次の言葉がある。地域の発展は世代を継いで実現することであり、高校の魅力化は地域活性化の中核プロジェクトであることが分かる。

これまで過疎地には、「産業さえあれば人は離れない」「雇用さえ作れば若者も戻ってくる」という幻想があった。しかし、子どもをもつ今の20代後半から30代の感覚は違う。特に高学歴層ほど、「子どもにより良い教育を受けさせることが出来るなら、多少の犠牲や負

担も厭わない」という意識が高まっており、雇用機会だけでは優秀な人材は定着しない。これからは産業と並行し、教育の魅力で子育て世代の流出を食い止め、逆に子連れ家族のUIターンを呼び込んでいく戦略が必要である。

豊かな自然と文化に囲まれ、人と人とのつながりが深く、安心安全な地域であるとともに、学力も人間力も伸びる教育環境を整えることで、「子育て島」として教育ブランドを築き、若い家族のUIターンを引き込み、少子化に歯止めをかけていきたい。

おわりに

離島の町に財政破綻、高校の廃校という危機が見えた時、町長がリーダーシップを発揮し、地域が一体となり、島民の創意工夫と招聘した「よそ者」の刺激によって町は変わり始めた。町長や建設会社がブランド食品を育てる経営力を発揮し、若者に夢をもたせ、地域活性化への道筋を見出した。恵まれた自然と地域の活気に魅せられて、移住者は2,400人の町民の2割に達し、高校への島留学希望者は定員の4倍を超えるようになった。

島では、ゴールは先だから「成功事例」ではなく「挑戦事例」と呼んでいる。この成果は、遠い離島の話で済ませるべきではなく、過疎化に直面するすべての地域に貴重な示唆を与えている。そのキーワードは「再建」や「存続」ではなく、「魅力化」である。

子どもたちが夢を見つけられる学校。「よそ者」が住みたがる町。地域活性化の最高の環境は、人と人とのつながり、「よそ者」の刺激、若者の夢である。

また、地域活性化の強力なエンジンは、町長のリーダーシップ、町長や建設会社の経営力、「よそ者」と地域との化学反応による知恵ではないかと思う。

隠岐郡海士町の挑戦を象徴するのが、町のあちこちに掲げられている標語「ないものはない」である。「あれがない、これがないと愚痴を言うな」という意味でもあり、「何でも、やれば作れる」という意味でもある。日本全国の過疎化に直面する地域にとって、学ぶべきことは極めて多いと思われる。



(注)

- 1) (株)アビー（本社：千葉県流山市）が開発した技術で、磁場を利用することにより細胞膜を壊さずに冷凍する。1年後でも生の風味・食感が保持される。食品保存のために研究されたが、最近では細胞、臓器の保存など医学、素材加工のための製造業との共同研究も始まっている。
- 2) 「島前高校魅力化プロジェクト」〈<http://miriyokuka.dozen.ed.jp/>〉。